

| |
|-----------------------------------|
| 令和5年5月6日 地震調査研究推進本部 地震調査委員会 |
|-----------------------------------|

2023年5月5日石川県能登地方の地震の評価（案）

- 5月5日14時42分に石川県能登地方の深さ約10kmでマグニチュード(M)6.5(暫定値)の地震が発生した。この地震により石川県で最大震度6強を観測し、被害を伴った。また、石川県では長周期地震動階級3を観測した。この地震の発震機構は北西-南東方向に圧力軸を持つ逆断層型で、地殻内で発生した地震である。
- その後、M6.5の地震の震源を含む東西約15km、南北約15kmの領域で、5月6日●時までに最大震度1以上を観測した地震が51回発生するなど、活発な地震活動は継続している。6日●時までの最大の地震は、5日21時58分に発生したM5.9(暫定値)の地震で、石川県で最大震度5強を観測した。
- 今回の地震により、石川県では、珠洲(すず)市長橋(気象庁)、輪島港(港湾局)観測点で0.1m(速報値)の津波を観測した。
- GNSS観測によると、今回の地震に伴って、珠洲市のSZMT観測点(京都大学防災研究所)で西南西方向に9cm、M珠洲笹波観測点(国土地理院)が南西方向に7cm程度移動、M珠洲狼煙観測点(国土地理院)が10cm程度隆起するなどの地殻変動が観測された。また、陸域観測技術衛星2号「だいち2号」が観測した合成開口レーダー画像の解析結果によると、M6.5の地震の震央周辺で最大20cm衛星に近づく地殻変動が検出された。
- 2023年5月5日に発生したM6.5の地震に伴って、石川県珠洲市のKiK-NET珠洲観測点で729gal(三成分合成)など、大きな加速度を観測した。
- 揺れの強かった地域では、地震発生後1週間程度、最大震度6強程度の地震に注意が必要である。特に、地震発生後2~3日程度は、規模の大きな地震が発生することが多くある。また、海底で規模の大きな地震が発生した場合、津波に注意する必要がある。
- 今回地震が発生した石川県能登地方の地殻内では2018年頃から地震回数が増加傾向にあり、2020年12月から地震活動が活発になっており、2021年7月頃からさらに活発になっていた。一連の地震活動において、2020年12月1日から2023年5月6日●時までに震度1以上を観測する地震が306回、このうち震度3以上を観測する地震が45回発生した。
一連の地震活動において、今回の地震が最大の地震である。この他、2022年6月19日にM5.4の地震を観測した。

- 一連の地震活動は、東西約 15 km、南北約 15 km の領域で発生しており、主に 4 つの地震活動域が見られていた。特に北側と東側の地震活動域で地震活動が活発であった。今回の M6.5 の地震はそのうち東側の地震活動域の北部で、M5.9 の地震は北側の活動領域の北部で発生し、その後の地震活動は北側の海域に広がっている。
- なお、G N S S 観測の結果によると、2020 年 12 月頃から、石川県珠洲（すず）市の珠洲観測点で南南東に累積で 1 cm を超える移動及び 4 cm 程度の隆起、能登町の能都（のと）観測点で南南西に累積で 1 cm を超える移動が見られるなど、地殻変動が観測されていた。
- 能登半島の周辺では、これまでも被害を伴う規模の大きな地震が発生している。2007 年 3 月 25 日には「平成 19 年（2007 年）能登半島地震」（M6.9）が発生し、最大震度 6 強を観測した。また、1993 年には今回の地震活動域の北方で M6.6 の地震が発生した。この他、今回の地震活動域付近で被害を伴った地震として、1729 年に M6.6～7.0 の地震、1896 年に M5.7 の地震などが知られている。
- 能登半島の北岸沖の海底には、活断層が存在することが知られている。これらの活断層は、概ね北東－南西の走向で、南東傾斜の逆断層であると推定されている。
- 地殻変動域の変化、地震活動の浅部への移動、電気伝導度の分布などから、一連の活動には、流体の移動が関与している可能性がある。これまでの地震活動及び地殻変動の状況を踏まえると、一連の地震活動は当分続くと考えられる。

注：G N S S とは、G P S をはじめとする衛星測位システム全般をしめす呼称である。